ミフユさん

おのえ朔

母は、十歳の私を台所に立たせ、包丁なしでできる調理を教え、いなくなった。

私が唯一食べられる魚である塩鮭を焼くための、ロースターのタイマー設定の仕方。ハムエッグはそばで見ていること。うっかりすると黄身が固くなりすぎて、喉に詰めるから気をつけるのよ。たまごはお茶碗で割って、殻や血が混じってないか、よおく見てからフライパンに移しましょう。血は親鳥のだから食べちゃいけないの。病気の鶏かもしれないでしょ。ベーコンをフライパンでカリカリにして残り物の野菜にもやしをたして野菜炒めにする。もやしは足がはやいから、使い切ってね。マーケットが近いからって、出来合いのお惣菜に頼らないのよ。買うならひと品だけにしないと、塩っ気のとりすぎになるから要注意。

私と両親は、団地の三階に住んでいた。エレベーターのない五階建ての古い中層建築だったが、私鉄の駅から出ている循環バスを使えば、病院や商店、学校、食べものやなど、暮らしに必要なものは、子供でも充分賄える環境だった。子供の衣類を置いているブティックもあった。

「おかあさんはご飯つくらなくなるの？」と私は訊ねる。

「お仕事で遅くなることもでてくるの。リコは女の子なんだから、台所のことは知っておいて損はないのよ」

母の言葉遣いは、いつも乱れのないものだった。その丁寧な物言いには有無をいわせないものがあり、子供の私には、その口からでる事柄は、疑いの余地のないものだった。

「上の階のおばちゃんが、きれいなひとは言葉も上品だねって言ってたよ」

母が化粧品会社にいるのは知っていた。デパートの売り場に出たりもする。毎朝きれいに化粧し、優しい香りを玄関に残して出勤する母は、私の密かな自慢だった。

「早くに死んじゃったからあなたは会ってないけど、わたしの母は訛りが嫌いでね。夏休みは母の実家にひと夏行かされてたんだけど、子供でしょ、従妹たちとひと月もいたら、訛りが移ってしまうのよ。するとね、家に帰って叱られるの。その場ではなくてね」

そう言って私を見ると、「でも、あなたはいいのよ。どんなふうに喋っても。親や他人を真似なくっていい。あなたはあなたでいいのよ」

一か月ほど家事の決まり事を教えると、梅雨のさなか、お風呂とトイレの掃除に合格点をだして、母はいなくなった。冷凍室には、一人分ずつ小分けにした料理が詰め込まれ、テーブルには「寝る前にガスの元栓を閉めるのを忘れないように」と鉛筆書きのメモが置かれていた。

母は遠くで仕事をしているという父の説明を、とりあえず受けいれた。両親の喧嘩は見なかったが、母の口数はめっきり減っていたし、もともとは軽口を言わない父が、私にちょっかいを出して機嫌を取ろうとするのも度たびだった。両親の振る舞いは不自然だった。

箪笥からなくなっているのは夏服だけだったから、「秋までお留守番？」ときくと、父は曖昧な笑みを浮かべていた。

父子家庭になってから、父は早く帰るようになった。とはいっても小学四年生が夕飯をとる六時過ぎには間に合わない。テレビを見ながらの食事は母に禁じられていたので、私はそれまでどおり台所のテーブルでご飯を食べた。

夏休みまえの短縮授業に入った日だった。夕立ちがあったおかげで、掃き出し窓を開けっぱなしにしていれば、涼しい風が通り抜けた。どこの家もそうだったのだろう、風といっしょに、五時半から始まるテレビ番組の主題歌が、台所に流れてきた。あっと思って、ビデオデッキを見に行くと動いていない。夕飯の支度どころではない。地団太を踏みたい気持ちで、大慌てでチャンネルをあわせた。

宇宙戦士の乗り込んだ巨大なロボットが、悪者を倒すという筋書きは毎回変わらない。その日は悪者が優勢で、ロボットがピンチになった。宇宙戦士のチームが救援に向かう。画面いっぱいにキャラクターが闊歩し、ビームが飛ぶ。

クラスの友達もまさに今、私と同じピンチに見舞われている。キャラクターが自分と一体になる。体が弾んで、強くなり、私は絶対的な正義になってしまう。私の興奮は、父が帰宅するまで続いた。

「とうさん、テレパシーだよ」

玄関のロックを外して出迎え、言った。父は何事かという驚きの顔で私を見つめた。

「どうしたんだぃ」

父は落ち着いた声で言い、部屋にあがってきた。

「かあさん、嘘ばっかしだよ」

寝室に入り着替えようとしていた父の背中に弾んだ声をなげた。

「かあさんはビデオで見たっておなじだからって言うけど、ちがったよ」

父は溜め息をつきながら振り向いた。しまった、「かあさん」を話題にしたのがまずかった。

「リコは戦闘ものが好きなんだね」

父の平坦な言い方に、私の声は勢いを削がれる。

「みんなと一緒にみてるんだよ、そんとき、みんなだよ、みてるんだよ。それってすごくないのかなぁ」

父がどう答えたか覚えていない。テレビを見ながらの食事を禁止するとは言わなかった。
母は、父と私から離れるために作戦を立てた。手始めにしたことが、私に家事を教えることだった。私は知らずに作戦に組み込まれてしまったのだ。母は私を自分の人生から排斥するつもりだ。一切連絡がないのは、その証拠なのだ。父が作戦にどう関わったかは、謎だ。だが、大人の計画が始動したのは確かだ。問いただせる相手は目の前にいる父しかいない。大人の都合に流されるのはごめんだ。
翌日から、私はテレビを見ながら夕食をとった。同級生たちは、テレビを見ながら家族でご飯を食べると話していたからだ。
口を動かしながら画面を追っていると、気分が高揚した。画面の中の誰かになれた。頬を膨らませたまま、くくっと笑いもできた。なによりも、独りの台所でたてる、すすったり噛みしめる音が気にならないのがよかった。父の帰宅と重なっても、私はご飯をほおばり、テレビの前から立たなくなった。
父がそのうちに怒り出すと覚悟はしていた。どこまで我慢できるか試していたのだ。

父の我慢は三日目に切れた。終業式の前日だった。
「リコ、やめなさい」
父の苛立った低い声が後ろから聞こえた。ちょうど画面はエンディングテーマソングにかわり、私の夕飯もほぼ片付いていた。私は箸をお菜の皿のふちにおいた。
「背中が丸まってるだろ。テレビか食べるか、どっちかにしろ。上目使いのぎょろめで箸も見てないじゃないか。ヒトの食い方じゃないぞ」
父のいうヒトではないそのままの姿勢を保って、私は次の叱責を待った。
想像してみた。カメラは下から私を撮っている。背中を丸めた私は、ガーンッと立ち上がりざまに全身を覆う殻を弾き、胸を張って、正義を問う。父と母が画策している計画を白状させるのだ。
私は機を狙って頑なに黙りこみ、丸い背中にエネルギーをため込んだ。私が口火を切るのだ。この場面のヒーローは私だ。だが、父に先手を打たれた。
「教わったことは忘れるな、習慣はくずすな」
そう言ってテレビの音量を下げると、冷蔵庫から持ってきた缶ビールを座卓に置いて、私の横に座った。
「とうさんは、おまえに、話がある」
わたしにもある、私を巻き込んだ計画を話してほしい、母に会わせてほしい、と言いかけたところで父が続けた。
「日曜日におまえの姉さんが来る。夏休みはここにいて、卒業式がおわったら、一緒に住む」
まじまじと父を見た。生乾きの風呂上りの髪が扇風機にあおられて、ふわふわしている。
「ねえさん？　それってだれ」
「岸川見冬。中学三年の、おまえと母親がちがうが、姉だ」
藪から棒、ってこのことだ。国語の授業でならった諺を思いだす。
「日曜日って、あさっての？」
父が頷く。
姉さんがいるってことは？
「かあさんの前におくさんがいたんだ。とうさん、再婚？」
隣のクラスに、父親が再婚で、前の奥さんのところに兄がいると自慢げに言う女子がいる。一人娘のその子は、母親ちがいの兄の存在を最近知った。その女子が触れて回っている話によると、その兄は、やたらと格好がいいらしい。私の場合はそのお姉さん版なのか。彼女は美人なんだろうか。
父は返事をしない。扇風機の回転する音がやかましい。
「ふたりともオレの娘だ」と小さいが強い声で言った。
アッとおもった。父は私にものをいうとき、自分を、とうさんと言う。オレと言ったことはない。でも思い出したのだ。私が布団に入ったあと、居間で母と声を潜めて遣り取りする声を。それには「オレ」が頻繁に混じっていた。抑え込んでみても、腹の底から湧き出るものが滲み出た挙句の「オレ」だった。
父は「オレ」の強さで、母を圧倒したのだ。母を抗えなくさせた「オレ」って何なんだろう。家出しても行く宛てすらない子供の私は、まるっきりの敗北を受け入れるしかなかった。

日曜日の早朝に父は出かけた。「帰りは四時の便だから、夕飯は寿司でもとろう」と言い置いて。
宿題ノートを広げるが、気づくと鉛筆を持った手が遊んでいる。応用問題の式を立てようとしても、キシカワミフユが邪魔をするのだ。私は諦めて宿題ノートを閉じた。
夕方ここに現れる少女は、私にとっては災難でしかない。彼女を早急に取り除きたいが、父という壁があるのですぐには無理だ。だが九月には帰ってもらう。しかしその間を凌ぐための方針は立てねばならない。それが先決だ。あとはそれに沿って行動すれば自ずから道は拓ける。
計算用の白紙を広げ、「夏休みのお客さん」と横書きにした。家族旅行に行ったときに、父が記入していた宿帳を真似るつもりだった。その下に「キシカワミ

フユ」と書いた。姓名の漢字表記、どこから来たのか。誰と住んでいるのか。情報がないのは父に質問しなかった私の手落ちだ。彼女が元の家に戻ったら、そのまま放置するよう父に言えばいい。決定権は私にあるのだから。そう考えると頭がすっきりした。

私は勉強机を離れ、押し入れからお客用の布団と夏掛けを出した。ベランダに干してから、冷蔵庫に麦茶が充分あるのを確かめ、また宿題に取り掛かった。今度は気が散らずにやれた。

日が暮れかかったころ、インターホンが鳴った。玄関を開けると、汗だくの父が立っていた。傍に大きなスーツケースがある。

「えっ、これ持ってあがったの」

「ああ」と言って玄関に押し込んだ。父の後ろにセーラー服の制服姿の少女がすっきりと立っていた。背が高く、頭頂部で髪を縛ったポニーテールが、はっとするほど似合っている。私よりも父に似ている気がする。

胸がきりきりして、来客には愛想よくと思っていた私の覚悟が吹っ飛びそうになったが、平静を装った。

父は少女を居間に上げ、寿司屋に出前の電話をしている。私はお風呂の支度をしてから、少女に麦茶を運んだ。少女は正座をしていた。私も正座で挨拶し、母の口調を真似た。

「お楽になさってください。父のあと、お風呂つかいませんか？」

少女が頭を下げる。

「シャンプーとかは、中にありますから使ってください、タオルもどうぞ。洗面台の横にドライヤーもあります」

少女が風呂から上がるのを待って、夕飯になった。

台所のテーブルの真ん中に寿司桶が一つ。少女には、私が定位置にしていた父と対面の席をすすめた。私はシンクを背にした母の席に掛けた。

「ひとりぶんずつ分けてもらった方が食べよかったかな」

父は抑揚をおさえたやわらかい声で言った。

「食べようか。二人ともおなかすいたろぅ」

箸をとってから「暑くないかぃ」とどちらに尋ねるふうでもなく言う。

「インスタントのお吸い物だったらあるけど」

私は返事を待たずに立ち上がり、私と父にマグカップ、少女には味噌汁のお椀を並べ、戸棚から使いさしの吸い物の袋をとりだし、二人の顔を見ずに用意した。

「うっかりしてた。ポットのお湯、ぬるいね、沸かし直すね」

父が何か言いかけて黙った。私は頓着せずに背を向けてガス台に向かった。しばらく夕立もきていない。窓を開けているが、薬缶やガス台の熱気が、扇風機だけの台所をよけいに暑くした。

「きょうは居間で食べようか。それがいいな、それがいい」父は一人で合点している。

「それがいい」

父はもう一度言い、先に立った。

「おとうさん、お寿司の桶、持ってよ」

挑む口調になる。私は立ち上がり、少女が目の前にいないもののように振る舞い、テーブルのものを盆に寄せ集めた。少女がすっと腕を伸ばして醤油さしを載せた。呟くように「持っていきます」と言って盆を引き寄せた。

「飛行機で来たんですか？」

スーツケースの持ち手に航空会社のラベルが付いていた。

「はい、初めて乗りました」

「ふーん、よかったですね」

乗ったことがない、と私は言わない。

少女の腕は長くてほっそりしていた。私はプールで日焼けした腕をひっこめ、無遠慮な視線を、少女の腕から頸、横顔まで這い上らせた。面長な父の輪郭のなかに、一重の目蓋のふくらみと、頬の隆起の柔らかな線があった。私は存分に少女を眺めおえると、盆を少女の方に押しやった。

夕食のあと、二部屋続きになっていた私の部屋に襖が戻され、その夜から隣が少女の部屋になった。

翌日、少女を案内してマーケットに行こうと部屋を出たところに、上の階のおばさんが降りてきた。踊り場で間近に出会ったおばさんの目は泳いでいた。おとなの狼狽が滑稽だった。

「おばさん、こんにちは。えっとお紹介します。姉です。よろしくお願いします」

おばさんより頭一つ背のある姉が礼をする。おばさんはもぞもぞと返事をして先に階段を降りていった。咄嗟の自分の対応に私の心臓は躍っていた。少女はじきに帰るお客だが、ここにいる間は父の娘としての立場を私の口から「姉」と紹介することで保証したかった。

私たちは、二人で夕飯のお菜の買い物と簡単な調理をした。取り決めをしたつもりはなかったが、洗濯と布団干しは姉が、風呂とトイレ掃除は交代でした。もう一つ姉がかってでたのは、父のワイシャツのアイロン掛けだった。クリーニング代がもったいないから、毎日洗濯してアイロンを掛けると言うのだ。

朝は父と三人でトースト。昼は素麺。熱湯のたぎる鍋で茹でるのは姉の役目だった。
姉は家事をさぼらなかったが、怠ける私の手助けはしない。父は浴槽がすべすべでないと、当然のように私に文句を言った。私たちはお互いの領分を侵さず、必要な事だけ話すのが暗黙の了解になった。
父から渡される家計費は、母が残した台所用のがま口に入れて調理台の引きだしにしまい、残金が少なくなると父が足してくれた。姉は来た翌日から、頼んだわけでもないのに、電卓でその日のレシートをみて合算し、がま口に残っている額と突き合わせた。私は大学ノートに毎日の支出を記入する係になった。

姉が来て一週間ほどたった平日の昼間だった。
勉強机に書き取りの宿題を広げて書いていると、私の後ろでアイロンがけをしていた手を休め、にじり寄って覗きこんできた。
「字ぃうまいんやね」
まえに国語の教科書を音読しているときも、姉が聞いているような気がしてやめると「じょうずに読むねぇ。じょうずやね。気にせんでつづけて。ごめん邪魔やった」と言っていた。
きょうは字を褒めたあと、先生に手紙を出したいから手伝ってほしいと言った。そしてコンビニのレジ袋からレポート用紙と茶封筒をだしてきた。私は自慢するつもりで、
「これ、ちょっとだけだったら使っていいよ」と花柄の便箋セットを机の引きだしからだしてみせた。
姉は嬉しそうに受け取ってぱらぱらと捲ると
「書いてくれん」とそっと差し出した。
「うん？」
「字きれいやもの。書くこと言うけん、筆記してほしい。わたしだめなんよ」
毛筆は、筆を扱う力加減がうまくいかなくて苦手だったが、鉛筆の字を褒めてもらうのには慣れていた。筆圧があってしっかりしているらしい。罫線のある用紙なら尚のこと自信があった。
クラスメートの町子ちゃんと市営プールへ行く約束は、宿題をしてお昼を食べてからの予定だった。町子ちゃんのおかあさんは高校の先生で、私のようにふらりと出かけられる小学生ではない。去年の夏までは、私も規則正しい生活を母に言われる小学生だったのだが。
「いいけど」と言ってから少し考えて、国語の辞書を目の前の本立てから引っぱり出した。
「いいんよ、知ってる字で」

私は下書きをせず、便箋の罫線のうえに、姉の声を直接ひろって書き付けた。姉はじっくりと考えながら喋った。時候の挨拶のあと、先生への用件が続いた。
「わたしは九月からこっちの中学へ行きたいです。お父さんの子供に早くなりたいです。お父さんに話してください」
それってなに？　話がちがうでしょ。戸惑った私が便箋から窺うように顔をあげると、姉の目は正面の襖に向いていた。私は襖を見た。勿論なにもない。
「えっと、ちょっと早くて書けなかった。もう一回」
そう言って少し前から読み上げた。姉はあとを澱みなく続けた。

自転車で十分ほどのところに、夏休みのあいだ市営の五十メートル屋外プールが開かれていた。学校の二十五メートルプールになれていると、その倍どころか、とてつもなく遠いところにゴールがあるようにみえる。足を着かずにどこまで距離を延ばせるかを、町子ちゃんと私はこの夏の課題にしていた。町子ちゃんとはスイミング教室で一緒だった。ふたりともクロールはできたが、腕前は互角だった。
息継ぎに顔をあげたときに眩しくないよう、陽が背になる側で泳いだ。プールの中央に近づくと表面の水温が上がってくる。強く水を掻くたび、キャッチした生ぬるい水が、腹のあたりを撫で太ももから足先へ流れる。いつもそのあたりで、息が入ってこなくなるのだ。苦しくて立ち上がり、プールサイドを見ると、一番大きい木陰をおとしている立ち木の延長線にいる。このラインを超えるには、整ったフォームがいるのだ。私は気を取り直して大きく息を吸い、次はあの木を越したもっと先まで行くのだと、残りの距離を泳ぐ。
今日は水の帯に腹を撫でられたところで、手足のバランスが崩れ、鼻から入った水が喉まで流れた。私は泳いでくる人を避けながらプールを横切ってあがり、木陰の下に入った。しばらくして気づいた町子ちゃんもあがってきた。膝を抱えてうなだれている私の隣にすわってのぞきこんできた。
「考えごとしてたら、ふつうに息しちゃった。水没。ハナがいたくて涙がでる」
町子ちゃんに今朝がたのことを話した。手紙の代筆をしたこと、内容は、父のもとにこのまま居られるよう転校させてほしいということ。
「先生っていうけど学校の先生じゃなくって、いま住んでるホームってとこの先生なんだって」
「おかあさんいないのかな」
「しーらない。いないんじゃないの」
「ずっと？」
町子ちゃんは首を傾げている。

「知らないけどぉ。夏休みが過ぎたら帰るっていってたのにこのまま居たいって先生にお願いしてるの。書いたのはわたしだけど、そういうのいやよね。約束どおりホームに帰ってよ。嘘つきじゃん」
「そんなのおかしいっていわなかったの？」と町子ちゃんは首をかしげる。
「なんかすごく真剣で言えなかった」
「はじめっから居続けをねらってたとしたら、カクシンハンだね」
今度は私が首をかしげた。町子ちゃんは中学受験を目指していて塾に行っている。おうちには本が沢山あるし言葉もよく知っている。「確信犯」の意味は私もわかっていたが、友達とのお喋りには使わない。町子ちゃんのそういうところがおしゃれで、私は好きだが、ざらっとしたいやな響きが耳に残った。
私は耳に水が入っているのを抜く素振りで、首を横に曲げて耳の上を手首でトントンと叩いてから、話をかえた。
「あのひと、暗算がすごいの。コンビニで買い物するでしょ。じっと見くらべて、これとこれで、なん円だから、まだ、アイスだったら買えるよ、とか言うの」
町子ちゃんは、ふふっとおとなみたいな笑みをうかべ立ち上がった。アイスで私が姉に釣られていると言いたげだった。
「もうちょっと泳ごうよ。来年の夏休みは塾の夏期講習があるから、今年はしっかり遊んでおきなさいって、おかあさんが」
私たちはプールサイドの立ち木からどれだけ先に行けるか頑張った。太陽は位置をかえ、水面はてらてらと光っていた。

八月に入ったが、手紙の返事はこない。気がかわった姉が投函しなかったのかとも思ったが、訊ねるのは憚られた。町子ちゃんのカクシンハンという言葉が胸のうちでせめぎ合っていたからだ。
代筆をして十日がたっていた。相変わらず瓶入りの素麺だしを緩めたお昼を、台所で食べていた。薬味の紫蘇の葉がもっとほしかったので、ベランダに摘みに立ち、洗ってキッチン鋏で自分の素麺の上にじかに散らしながら、なにげなさを装って言う。
「お手紙の返事きた？」
姉が首をふる。私は細く千切りに散らしながら、
「ねえ、キシカワさんが転校したいのは、夏休みの宿題しなくていいから？」
そんな単純なことでないのは分かっていた。本当はカクシンハンなのかと問いたかったのだが言い出せなかった。だからどうよ、と返されでもしたら、そんな人と一つ屋根の下で暮らせない。
姉は驚いた顔で私を見、頬ばっているものを飲み下すと「いいえ」と俯き、宿題は持ってきていてやり終えたと言った。
「図書館へ行きたいのです」と俯いたまま言う。「図書館の貸し出しカードは市内に住んでる証明ができないと作ってもらえません」
私をじっと見ると、ひと息の早口で言った。
「リコさん、きれいに字がかけるね。声、テレビのアナウンサーみたいやし、すごいよ。大学に行けるよ」
強い眼差しに見据えられた私は、仰け反りそうになった。
「あ、ありがと。キシカワさんも、おとうさんに頼めば行けるよ」
たじたじとなって返した。
「わたし？　わたしはだめ。問題を読むのが遅いし、答えはわかっていても答案を書くのもおそいん。まにあわない」
今度は私が姉の顔を見つめる番だった。私は本が好きだ。好きの度合いからいうと、テレビより上だ。いま読めるのは子供の本だが、五年生になったら細かい字の本にもチャレンジするつもりだ。
「キシカワさん、本、いるんだったら」と軽くそこまで言って、口籠ってしまった。
「ゆっくりなら読めるんだよね」と何でもない事のように言い切った。
「わたしの本箱にあるの、貸すよ」
申し訳なさそうな囁く声が返ってきた。
「絵本がいいです」
中学生なのに漢字が読めないのだろうか？　本箱には母がカタカナに平かなでルビを振ったのもある。登場人物の名前がカタカナなのに、小学校で習うまで読めなかったからだ。
「絵本もあるよ」
絵本も数十冊押し入れに残してある。愛着があって母も私も捨てがたくて置いていたものだ。訳も分からず私はうろたえていた。キッチン鋏をテーブルに乱暴に置くと、居間に大股で立って行って、押し入れから紙袋を二つ出して、足元に置いた。
「ほら、ここに置いとくから、あとで見て」
テーブルに戻ると姉から顔を背けて、紫蘇の葉が大盛になったソーメンを一心に食べた。

翌日、出勤の支度をした父は玄関で靴を履きながら、来週中に転校の手続きをするからそのつもりでいるように、と姉に言った。私には、姉も同じ姓になるから、キシカワさんでなくなるよ、とひとこと言って「ホームの先生から会社に電話をもらった。見冬から手紙が届いて先生は驚かれたそうだ。最後に李子代筆っていうのを見て、安心されたんだが。おまえたちはそんなに馴染んでいたんだ

ね。とうさんは知らなかった。ふたりの希望に添うようにするよ。本来ならホームに挨拶に行かねばならんが、しばらく時間がとれない。また別の機会にしよう」

靴ベラを下駄箱の横に掛けると「じゃ行ってくる」とドアをあけ、思い出したように、「見冬の荷物はまとめて送ってもらうから」と背中を向けたまま言い、階段を足早に下りて行った。

私たちは狭い玄関で閉まったドアをみつめていた。「あっ」と姉は言い、内鍵を回しチェーンを掛けた。

私は台所で冷蔵庫から冷たいお茶をだして水筒に詰めた。なんとお人好しの大人なんだろう父は。私が代筆したのを知り、あの手紙の内容を、二人の意思だと自分に都合よく解釈したのだ。ひとこと声をかけて確かめる気など、はなからなかったのだ。

このまま部屋にいたら、姉に掴みかかりそうな気がした。母が帰ってこないのは、キシカワさんの出現のせいだといって。それが八つ当たりだと知っているのだが。

深夜、母と話す「オレは」と押し殺した父の声が蘇ってきた。アパートから団地に越したころ、母は私の手をひいて保育所に送りながら、「貯金して、おうちを買おうね」と口癖のように言っていた。いつから聞かなくなったのか。母が、家を買うという夢と一緒くたにして、私も捨てるつもりなら、それでいい。

「私は水筒を斜め掛けにし、首にタオルを巻いた。

「どこ行くん？」

「ちょっと出てくる。お昼はパン買うからいい」

姉は台所に走って行って、がま口から千円札をだして私に握らせた。

「ごめんやけん」

「うちの親の事情も知らないヒトが、簡単に謝らないでよ。キシカワさんに関係ない。これは、あたしんちの事情なのよ」

父が降りて行った階段は、細かい砂でざらついていた。母は階段掃除を私に教え忘れたのだ。私はスニーカーの底が踏みつける砂粒の軋みに苛立ちながら、父も母も、所詮は単なる大人なのだと思うことに決めた。

三階からの階段を降りきると、蝉の鳴き声とアスファルトに反射する熱気が被さってきた。行く先は図書館くらいしかない。麦わら帽子と自転車の鍵を忘れてきたことに気付いた。十分ほどの距離だ。歩こう。取りに戻るのはいやだ。間が抜けてしまう。姉に見られるのはとても我慢ならなかった。

閲覧室にいるのは、大人ばかりで、知っている小学生はいなかった。私は漫画をかたっぱしから読んだ。ざわざわし始めたので見ると、小さい子供や親子連れが二階に上がって行く。しばらくして人の出入りがまばらになってから、漫画にも飽きた私は、二階の様子を見に行った。

階段を上がってすぐの部屋は、胸高の窓が廊下に向いていた。閉めたガラス窓越しに、子供や親たちが床にじかに座っているのが見えた。寝転んでいる小さな子もいる。覗いていると、気づいた女の人に「いらっしゃい。お入りなさいな、始まったところですよ」と細く開けた扉の隙間から声をかけられた。

正面の低い椅子に女の人が一人掛けて、本を広げている。読み聞かせの時間だった。小学校に上がるまで、母がよく連れてきてくれた。

私は後ろの方で、立てた両膝に顎をのせ、お話をきいた。閲覧室より冷房が効いている。汗ばんで背中にくっついたブラウスが、体から離れて乾いていく。心地がよい。

お話の筋を辿るより先に、語る声に吸いこまれ、ほんの僅かのあいだ眠った。ささやくような笑いで空気が揺れ、目をあけた。みんなが正面を向いて顔をほころばせている。私は頭を起こして座りなおした。

斜め前あたりに背筋を伸ばして正座をしている人があった。髪を首筋で束ねている。姉だとすぐにわかった。唇の間から歯がこぼれている。私には届かない声で、笑っている。誰もが笑っていた。静かなのは、母親の膝で眠ってしまった小さな子供と、私だけだった。

そっと部屋を出て、閲覧室に戻った。全身を循環する血液の音が、耳の奥で騒いでいる。見たことのなかった姉の笑顔に私は動揺していた。

児童書の棚に手をのばすが、背文字を読もうとすると姉の笑みが浮かび、視線はうろつくばかりだ。上の空で手に触れた一冊をとった。開くと裏表紙に、鉛筆書きのタッチのリスがいた。ぴったりとしたベストを着ている。男の子のリスだ。

旅するリスの物語だった。すぐにストーリーに引き込まれてしまい、姉のことは忘れていられた。一気に読み終わると、裏表紙に戻った。リスの絵を指で撫でながら、きのうの姉のことを考えた。

きのうキシカワさんは、昼食のあと、私の絵本を居間の座卓に広げ、一字ずつ声に出していた。それは朗読とはいえず、鳥が一粒ずつ餌を啄むように、平かなを一つずつ拾っていた。文字がおなかに溜まると、つるりとひと息の言葉になって口から出てくる。それが繋がって私にも聞き取れる文章になる。

そんなに時間がかかっていては、かわいそうなリスをおもう切ない気持ちになる前に、キシカワさんは疲れ果ててしまう。永遠にリスの心に寄り添えないのだ。キシカワさんが心底かわいそうで気の毒だった。私は腹を括った。あの宿帳は廃棄して、キシカワさんを受けいれる。

そう覚悟をきめると、突然空腹に襲われた。一時を過ぎている。貸し出し用のカセットテープのコーナーがあったのを思い出し、絵本と一緒に、落語や朗読を混ぜこぜにしてカウンターに持って行った。帰りの道すがら、姉の分も多いめに甘いパンを買った。

姉は先に帰っていた。パンの袋を渡すまえに、

「これ」とカセットテープと絵本を差し出した。

「あたしに借りてくれたん？」

私は頷いた。突然よい考えがうかんだ。一緒に図書館へ行くなら姉にも自転車がいる。

「キシカワさん、自転車のれる？」

姉が頷いた。

盆休みに父と三人で買い物に出かけた。姉の引っ越し荷物は段ボール箱だけだったので机とベッド、本箱に姫鏡台を買った。ちょうどバーゲンセールをしていたので、Tシャツやスカートを、私の分も含めて選んだ。姉は古ぼけた衣類しか持っていなかった。父にこそっと耳打ちした。

「下着も買わないと」

「こんど。二人で買いに行け。おまえのも買っていいから」

「恥ずかしい？」

父は目で笑って「あたりまえだ」と言った。

買い物の本来の目的は、姉のためにママチャリではないおしゃれな自転車を父に買わせることだった。そうなれば、私が大人の自転車に乗り換えるときも、少々高くても気に入ったのを父に要求できる。

それから、カセットテープを録音再生できて、ＦＭとラジオはもちろん、ＣＤも聞ける重低音装備内蔵の最新コンポも買ってもらった。父は「えらい散財だな」といいながらも満更ではない様子で支払ってくれた。

私はそれを使って、カセットテープに自分が気に入った本を朗読して納め、姉に渡した。新聞は父が読むだけだったが、私はラジオ欄を細かく見て朗読番組をテープに録った。読み書きのできる私は、姉という庇護すべき相手をみつけて得意になっていた。

私が我が物顔で振る舞う浮足立った日々が続いた。それに歯止めをかけたのが、台風が掠って過ぎたけれど、まだ風の強い早朝の事だった。

新学期は始まっていた。朝いちばんのトイレで下着の汚れを見つけた私は、慌てた。初潮については保健室の先生から教わっていた。箪笥には、母が準備したものが整っている。しかしこのわずかなシミが保健室の先生がいうものなのか判断がつかなかった。お尻が変な病気なのかもしれない。私は風呂場の手洗い用の洗濯バケツに下着を放りこんだ。

父は早くに出勤し、姉と二人だった。姉は自分の弁当を詰めるのに忙しい。二人の水筒を並べ、冷えたお茶を注いでいる。テレビ画面の時刻表示をみると、家を出るまで三十分ほどあった。

引きだしを捜すが、母が買い置いてくれたものが見つからない。

「どうしたん、なに、さがしとるん」

私は引き出しに片手を突っ込んだまま振り向いた。引き出しを半開きにしたまま、姉の手を引っ張って行って、風呂場の手洗いバケツを指さした。風呂場の鏡に、半べそをかいて歪んだ幼い顔があった。姉は事態をすぐに察知してくれた。

「かあさんが用意してくれてたのが、どこにいったかわからない」

「うん。捜すのはあとにして」と小首を傾げ「今日はうちのをつかわん？　洗い替えがいるから、学校がすんだら買いに行こう。ひとのんはすかんやろうけど、ちょっとだけ辛抱して」

私は頷いたが、ランドセルのそばに、水着やタオルをいれたビニールバッグがあるのを忘れていた。

「きょう、プールがある。学校行きたくない。いやだっ」

プールサイドで見学する女子に、男子が陰口を言うのをいつも聞いていた。それを「ガキだからね、ダンシは」と言える仲間に入るには時間が必要だった。

姉はちょっと考えていた。

「学校は、休めばいいんよ」と落ち着いた声で言った。

「とうさんには言わないで」声が引きつっている。

「うちが学校に届けるけん心配せんで。何組やろ、先生はだれ」

私はすがるような目をしていた。

「南小学校、四年三組、越智先生」

姉は口の中で復唱した。

「番号おしえんね」

私は、母が冷蔵庫に貼っていた番号のメモを取り、受話器をとった姉に数字を読み上げた。私は体調不良で欠席になった。

受話器を置きながら、

「これは、嘘じゃなかけんね。女子には休養がいるときがあるんよ」と重おもしく言った。

姉に渡された水色の下着を風呂場でつけていると、かしこまった口調で喋る姉の声が聞こえてきた。耳をそばだてる間もなく、ガラス戸の向こうに姿が映った。

「お弁当できとるし、ファミリーランド、つきあわん？」
プールの授業が終るのを見計らって登校もできるのに、ずる休みをする私が遊びに行くなんて。誰かに見られたらどうしよう。私は口籠った。姉の影は、返事を待たずにすっと遠ざかった。
台所を覗くと、おにぎりを結んでいる。私は焼き海苔の缶を棚からおろした。
「ミフユさんも休むの」
「うん。あたしは具合の悪い家族の付き添いをします、いうて電話したよ。行ってみたかったんよ、まえから。ジェットコースター、乗った？」
「ううん、背が足らなかったの」

電車で三十分ほどだったが、二人だけで乗るのは、初めてだった。風はおさまっていた。平日だから人は少ないし、小学生はいない。
お猿が車掌の汽車で園内を巡った。コーヒーカップに乗って目を回し、観覧車に乗り、お弁当を食べ、ジュースを買った。最後の極め付きが、ジェットコースターだった。線路のてっぺんまで小刻みに引き上げられ、突然、目の前の青い空に放り投げられた。と、次の瞬間、轟音とともに滑り落ちる。私たちは声の限りに叫んだ。
「キシカワサン、こわーい、たすけてぇ」と私は繰り返し、姉も「キシカワさんもチョーこわい」とこたえた。
それは、私が姉を「キシカワサン」と呼んだ最後だったように思う。そのあとしばらくは「あのね」「ちょっとね」ですませた。狭い間取りの家の中では、相手の名前を呼ばなくても、はなからそれですんだのだ。

十月に入ったある日、父が「瀧田見冬になったからね」と言った。家庭裁判所から書類がきたのだそうだ。姉は画数の多い苗字を、私の作った下書きの上に書いて練習した。私は姉をミフユさんと呼ぶことにした。
父に「姉さんと呼ばないのかい」と言われたが、呼んでほしいかと私は返し、父が答えるのを遮った。「わたしとミフユさんはチームなの。だからいいの」
そう思ったのは、「保護猫を家族に迎えましょう」というキャンペーン冊子を図書館で見たからだ。写真に言葉が添えられた薄い冊子には、片方の前足が半分もげた大きな保護猫が、先住の猫と馴染んでいく様子が、写真と添えられた言葉で紹介されていた。
飼い主に猫じゃらしで遊んでもらっている先住の子猫のアップの貌。髭が鼻先に向いて立っている。次のページには、痩せた背中を画面に向けた保護猫を、子猫が威嚇しているのが写っている。尻尾と体を膨らませた生意気な子猫。保護猫は俯いて座っている。

目いっぱい毛を立てて体を膨らませているのは私だ。大きな雉猫は姉。手先しか映っていないけれど、猫じゃらしを使っている飼い主はとうさんだ。
私が冊子を見て得た教訓はこうだ。今こうして遊んでくれている飼い主も、都合が悪くなると猫たちを捨てる。なぜなら、俯いている保護猫にもあの子猫のような時代があったのかもしれないから。これからだって子猫も保護猫も、いつ捨てられるかわかったもんじゃぁない。どうであれ捨てられても生きねばならない。二匹はきょうだいである必要はない。寄り添える距離にいればチームになれる。

父から離婚を告げられたのは、肌寒くなったころだった。母の住所と電話番号を教えられ、親権者はとうさんだと言った。
「シンケンシャって、なに？」
「わかりやすく言うと、李子と美冬が成人するまでの、保護責任者だな」
「ミフユさんのお母さんは？」
「病気で死んだ」
置いてあった母の荷物は、誰もいない昼間に運び出された。

三人での暮らしから最初に抜けたのは、父だった。私が六年生、姉が十七歳の春のことだ。子会社に出向になり、会社の単身者向けの寮に住むことにしたので、おまえたちは、ここで暮らすようにと言った。
二年半で三人の暮らしはついえたのだが、二人になっても困ることはなかった。姉は、中学校で紹介されたパン屋に、日が上がる前に起きて出勤していたし、変化といえば、中学生になった私が、自分で弁当をこさえるようになったことくらいだった。とはいっても、姉が取り置いてくれた前日のお菜を、少しだけ早く起きて弁当箱に詰めるだけだ。姉が売れ残りのパンを持って帰った翌日は、それを持って行った。
父は月に一度帰ってきて、ファミリーレストランで好きなものを食べさせてくれた。そのうちにまた一緒に暮すのだと思っていた。だが事態は、一年ほどたったころに掛かってきた夜の電話で変わった。
とったのは姉だった。電話台を置いている廊下から、はい、と応じるのが続く。何分かして返事が途絶えた。私はテレビの画面から目を外さず、声をかけた。
「だれ。とうさん？」
夜分の電話だ。父ぐらいでしかない。返事がないのが妙で立って行った。電話台に電気スタンドがあるのに、点けていない。薄暗いなかで、姉は立ち尽くしていた。
「とうさんになにかあったの」

姉はかぶりを振った。いったいどうしたのよ、と詰め寄りかけたとき、ゆっくりと口をひらいた。
「今の会社を辞めました。友達と事業を立ち上げるので忙しいから、当分帰れない。落ち着いたら電話するから待ってなさい。振り込みに支障はない」
「はぁ？　それだけ。ミフユさん、それじゃ電報だよ」
姉は話の要点を簡潔にまとめることに長けている。以前に父が笑って言っていた。李子は肝心のところが要領をえない。美冬は、要点のみの電報みたいだけど、大事なことが抜けてなくて安心だ。
送金の減額はない。暮らしはたつのだ。私たちはするべきことをしていればよい。姉はパン屋さんで働き、私は公立高校に受かるよう頑張る。
私は姉の動揺に添えなくて、軽くその場を流すように言った。
「とうさん、死んじゃったのかとおもった。びっくりしたよ」
居間に戻った姉はぺたりと畳にへたりこんだ。
「そのほうがまだよかった」と呟く。軽口にしても同意はできない。
「死んじゃったほうがいいってなんのこと。そんなのかわいそうだよ」
姉の耳に私の言葉は入っていない。
「死んだなら諦めがつく。捨てられたんやなかけん」
「どうしてそんなこと言うの。お仕事忙しいだけよ。とうさんは、わたしたちのシンケンシャなのよ、捨て子になんかしたくてもできないんだよ」
姉は聴いていない。
「おかあさんは死なっしゃったんで、うちを捨てたことにはならん。ばあちゃんなぁ葬式だしてから先生と一緒にきて、うちに訊きなはった。おとうさんに会いたいかて。はい、て言うたらおとうさんはすぐにきた。すぐやった。生きとらしたんや。あぁ、うちのこと気に掛けてくれてたんや。ほんにうれしゅうしてうれしゅうして」
訛りがどんどん強くなる。私は姉の方言に引き寄せられるように、前にすわった。
「ばあちゃんが言わっしゃると。おとうさんはうちが生まれたこと知りなはらんかったのやて。おかあさんが教えんかった」
姉の表情が歪むたび、私の知らない人の顔が一瞬現れ消える。また現れる。姉の心の中で母親が大暴れしている。止めなくちゃ。ミフユさんがおかあさんの恨みにもっていかれちゃう。
「私のとうさんはミフユさんの父親に値しない男だったんですね」
「え、なんね？」
私が馴染んだミフユさんの顔が訊き返してきた。ふと思った。
「ミフユさんはリコのこと憎んでる？」
「そげん、おもいよらん」
「妬いてる？」
「妬いとるんかもしれんね」と、はにかむように返した。
「リコちゃんはおとうさんとずっと一緒やもん。うちはまだちょっとの縁やのに、しまえてしもうた。くやしかよ」
「わたしのかあさんは生きてる。ミフユさんの言うとおりだとしたら、母は小学生のわたしを捨て、父は中学生のわたしをすてたんだね」
姉は俯いて、ごめんと言った。
「とうさんのこと、しばらく待とうよ。私たちが騒いだってしようがないよ」
十八歳になるのを待つようにして、姉はパン屋をやめた。朝が早いのが辛いのもあったが、パンの売れ行きによって給料が左右されるのが納得できないと言った。売れ残りのパンが持ち帰られるのを喜んでいた私は、浅はかだった。あれは給料の不足分の現物支給みたいなものだっだ。
姉の就職活動は素早かった。半月もしないうちに、大きなレストランのレジ係になった。数字に強い姉にうってつけの仕事だと、二人で喜んだ。はじめは午前と午後のシフト制だったが、本採用になってからは、時給のよい夜に詰めるようになり、フロアにも出るようになった。
帰りの時間は遅くなり、どんどんきれいになっていった。読み書きは不得手だけれど、数字には滅法強いだけの少女ではもうなかった。
十二月に入った日曜日、家電の量販店から姉宛てに荷物が届いた。依頼主は父だった。
「ワードプロセッサー、ってワープロのことだよね」
私たちは、居間に運んだ段ボール箱を、おっかなびっくりで開けた。
「わあこれってすごいよ。ミフユさん、これでお手紙書けるよ」
姉は困惑した表情だったが、私は嬉しかった。同じ父親の娘でありながら、読み書きに困らない妹と、かたや不自由な姉とのちがいが、姉のことを知るほどに理不尽におもえ、私の負い目になっていたからだった。
「手紙出したい相手って、おらんもん」
「うーんっと、そうだ、いなかのおばあさんは？　それがいいよ、ね」
翌日父からきたファックスに、ワープロ教室の受講料を振り込んだから、習いに行くようにとあった。
「とうさん、考えて行動してるって、えらいじゃない」
姉は黙っていたが、昼間のワープロ教室に通い、習ったことを私に教えてくれた。

新年とお盆はお小遣いを上乗せしての振り込みだったのが、ブラウスやセーターのプレゼントになった。二度目に送られてきたとき、二組のカーディガンのアンサンブルを広げ、私は感想を言った。
「なんかおかしくない。妙にセンスいいよ。とうさんが選んだのかしらね」
「オンナがおるんよ、おとうさん」と姉は断定した。私も内心そう思っていたが、疑問の余地なし、という口調に、複雑なきもちだった。
「よかやん。面倒見てくれる人がおって」
死んでくれた方がまし、という父親への執着は感じられなかった。執着を断ち切ってくれる相手に出会えたのかもしれなかった。
姉は仕事の話はしなかったが、知らない店のマッチが居間に落ちていたので拾って見せると、スナックを手伝っていると言った。
「そのマッチ、捜してたんよ、ありがと」
「レストラン辞めちゃったんだ。お店ってどこらへんにあるの？」
「ちっちゃい店よ。ノルマがないけん気楽でいい」と答えた。

姉から、結婚すると打ち明けられて私は驚いた。はたちになったばかりだし、ついでみたいに「赤ちゃんが生まれるんよ」と言ったからだ。
「お店で知り合ったの？」
「そう、お客さん」
余木さんという義兄になる人は、十三歳上だという。それを聞いた私は、姉の幸福から一歩後ろに飛びのいて身構えてしまった。余木さんという人が、姉にとっての父親にとってかわったのでなければよいと。
姉は団地の沿線に新居を借りた。「三十分で来られるよ。赤ちゃん生まれたら手ぇかしてね。頼りにしとるけん」
近くに住むのは一人暮らしになった私への配慮だと嬉しかった。姉と私はこれからもチームであり続けるのだ。
五月に女の子が生まれ、「木夏」と命名された。高校に入学したとたん私は叔母になってしまったのだ。深夜、団地の明かりがすべて消え、独りで受験勉強をしているとき、赤ん坊の精巧に創られた手の平や爪、体温を思い出すと、暖かい気持ちになれた。
父の会社は順調なはずだった。それを充てにして、団地から通える私立大学を志望校にした。

大学二年の暮れに、父から授業料は払えないとメールが入った。会社が倒産したという。私は打ちのめされた。大学どころか食べていくことを考えねばならない羽目になったのだ。

話を聞いた姉は即座に答えた。卒業までの生活費と学費を貸してあげると言う。
「卒業したら、本のいっぱいあるとこで働くんやろ」
「書店員になるのもいいかな」
「本屋さんもよかけど、大学出てからの話しやわ。このままで、分かりましたと済ましちゃいけん」
姉は驚く行動に出た。おとうさんに会ってくるので、木夏と家で待つようにと厳命した。「わたしもぉ」行くけどと言いかけたのを制した。
「リコちゃんは留守番しよって」
父を呼び出した姉は、来期の学費までは払うという約束を取り付けて帰ってきた。
「リコちゃん、あんたに黙ってで悪いけど、親子の手切れ金を出してくださいと言うたよ。女の人と一緒におんさるなら、そん人に食べさせてもらえばいいと言うたよ。一人扶持は食えんでも、二人扶持は食えるって言うでしょって。生まれたときから一緒やった娘なんよ、親としての義理というのがあるでしょうもん」
姉の強い口調は続いた。木夏を纏わりつかせながらソファーで喋る姉を、感心して見ていた。きらきらしている。無口な姿しか知らない父は、元気な姉にさぞかし驚いただろう。
上気した姉に相槌を打つうちに切なくなってきた。姉は、私を媒介にして自分の思いを父に訴えてきたのだ。どんなに父を愛していたか、愛されたかったか、思いのたけをぶちまけたのだと。
「しょせん口約束。おとうさんが反故にするならそれまでのことやけど」
あまり期待していない口振りだった。そして、余木さんには父の失業を伏せるように、これは身内のことだからと言った。
三月になって授業料納入期日間際に、銀行へ行った。父は前期の授業料にひと月分の生活費を加えた額を振り込んでいた。「三回生になれますありがとう」とメールをした。返信はなかった。
姉は授業料を、父と私の縁切り金だと言った。通帳に印字された振り込み人の父の名前を見てふと思った。姉はそれすら払われないのを待っていたのではないかと。期日がきても振り込まれていない通帳が見たかったのではないかと。
姉に報告するのは授業料の入金だけにした。そのあと不定期な少額の振り込みがあったが、黙っていた。余木さんと木夏と専業主婦になった姉の三人家族に、父はもう必要のない存在だと思った。

大学三年の夏休みのことだった。居酒屋でお運びさんのアルバイトをしていたが、その日は休みだったので、一週間分の食材の買い出しをして、帰ったとこ

ろだった。二十歳のお祝いにと、姉がお揃いの機種で買ってくれた携帯電話が鳴った。

用件は、木夏のお迎えだった。幼稚園に迎えに行くことはあったが、それはたまのことで、前もって予定している日に限られていた。

結婚前に働いていたスナックの近所にあるうどんやだと姉は言った。

「うどんやさん？」と訝しく返す私に、姉は団地のある私鉄の本線が、支線と交わる駅名を言った。風俗店が並ぶ駅裏のその歓楽街は、男子学生が立ち寄るには勇気がいる所で、もちろん私は足を踏み入れたことがない。姉がその街で働いていたなんて知らなかった。

そんな所になぜ木夏がいるのだろう。とにかく私は駅に向かった。電車を降りて姉が電話口で教えた道順のメモを、口の中で読み上げながら、駅の裏に回り込んだ路地に入った。

真夏の陽が落ちるまで間があり、店の電飾看板に明かりは入っておらず酔客に出くわすこともなかった。場違いなところにいる引け目で、私は顔を上げられず、開店準備に出入りする黒服の従業員や、店用の衣装を着けた女の人の濃い化粧の視線に、目を伏せて歩いた。

うどん屋なんてどこにあるのだろうかと心細くなったところに、平かなで「うどん」と白抜きした暖簾をみつけた。間口は引き違い戸の幅しかなく、板張りの外壁は雨に晒されくすんでいる。けばけばしい通りに、時流に取り残された民家のようだ。

引き戸に手をかけると、カラカラと軽い音をたてて開いた。正面奥が厨房で手前にカウンター席が幾つか。テーブルが三席の手狭な店だ。真ん中のテーブルを挟んで、作業服の男と薄い色の半袖ワンピースを着たおばさんが、ビールを呑んでいる。私が姉の名前を言い挨拶した。

「あんたが妹ねぇ」

品定めをするような目つきに、思わず目を逸らせた。男がおばさんの声につられるようにグラスから顔をあげ、首を回して私をとらえると、瞬きをしてから視線をゆっくりとグラスに戻した。呼気の湿り気をおもわせる生暖かい目つきだ。私は身震いを抑えて浅く息をした。

テーブルにはビール瓶が一本立っているきりだ。六時近くだというのに、厨房には人の気配も食べものやの誘うような香りもない。今日は休みなのだろうか。男の様子は開店前にふらりと寄った馴染客にも見える。迎えに来たついでに、木夏と夕飯をここで済まそうかと来た私は、店の様子に戸惑った。

壁のメニューは、うどんが五種類ほどに、おにぎり、ビール焼酎とある。壁をたどっていくと、二階に上がる階段が通路を挟んであり、子供の靴が上がり框の下にあった。木夏の通園用のスニーカーだ。

おばさんは立って行くと、引き戸を開けて暖簾を内に取り入れながら、

「分かりにくかったやろ。素通りされたら困る思うて、出してたんや。おばさんと姪っ子だね。母親より似てるってあるんだね。歳の離れた姉妹だよ」と私を顧みた。

今しがたの刺すような目つきは消え、口もとには目の前の相手を取り込んでしまう人懐っこさが漂っていた。木夏の面立ちは、すらっとして格好のよい父親に似ていると思っていたので面映ゆく、おばさんの口調に吸い込まれるように微笑んだ。

「きなっちゃん、お迎えやで。忘れもんせんようにして降りといで。テレビ消しといてや」

待ち兼ねていたように元気な返事があり、軽い足音がして、止まり、ひと呼吸あった。

「リコちゃんか」

がっかりした声が上からした。踝がのぞき短パンの素足が見えた。通園かばんを一段ずつ、わざとらしく引きずって降りてくる。

男が身じろぎをした。私の目の端が、階段に向けた男の横顔をとらえた。男の視線の先に、上がり框に腰をかけ、靴をぐずぐずとつま先でいつまでも探っている木夏がいる。

私の体がつっと動いた。木夏の前に立ち、ノースリーブのブラウスに丈長のフレアースカート、素足にサンダルの私の全身で、男の視線を遮った。そして小さな体に被さって、耳元で囁いた。

「ぶしょうしないで立って履きなさい」

肩までの髪が木夏の顔にかかる。目尻が二重の丸い目を見開いて私を見上げ、目をそらさず頷いて素直に従った。訳も分からず叱られているが、今、リコちゃんが命じることは正しいに違いない、という勘を働かせている子供が、私の前にいた。

立ち上がった木夏に「忘れ物はないですか」と改まった口調で言う。頷いてから慌てて「はい」と答えた。二人でくるりとおばさんの方に向き直ると、男はよそを見ていた。木夏から通園カバンを受け取り肩に掛け、お辞儀を促した。

「さよーなら」

のばした腕を体の前で大きく交差させ、お辞儀をしながら、幼稚園の帰りの会の口調で言う。

「愛想なしやったね」

おばさんは微笑み、私に向いた。

「うちの店は商売が仕舞うたあとのおんなのこらが夜食に来るんよ。繁盛するのは遅うなってからや。この子におやつは食べさしたけど、時分やから、おなかはすいてるやろ。あんばいたのむわな」
そして木夏のおかっぱの頭に手を置いた。
「今晩のおねえちゃんの、ご馳走はなんやろな」
「リコちゃんは、オムライスだよ。ケチャップじゃないよ。トマトからソースをつくるの」
いつだったか姉の家でケチャップが足らなくなったので、ホールトマトの缶詰に手を加えてごまかした時のことを言っている。私が小さな声で、恥ずかしいから言わないでよと言うと、
「ええなあ」
ふんふんとおばさんは相槌をうった。
表に出て引き違い戸を閉める音に、男のいがらっぽい声が重なった。「はなさん」と姉の源氏名を言い「妹がおるんか」と聞こえた。
私は数歩離れた所でほっと息を吐き、男の声と視線を振り払って左右を見た。
「えっと、どっちから来たんだったかしら」
「こっち」木夏は言って私の前を横切る。行く方向に、来しなに見たデフォルメした半裸の女性がウインクしている看板の店があった。木夏はスキップをしながら先を行く。
路地は静かだった。開店の準備は整っているようだ。手ぐすねをひいたおにいさんが、店の入り口に立って客を引き込もうと待っている。
角から少年の乗った自転車が出てきた。路地を突っ切るように、真正面から来る。スピードを落とさない。道の真ん中を行く木夏を標的にしているように見える。見えないはずはないのに木夏はまるで頓着せずスキップをやめない。
「端に寄って」と叫び、駆け寄ろうとした私の前で、木夏はぴたりと足を止めると、首だけ回してにっと笑い顔をつくった。私の体は硬直し、足が前に行かなかった。この子はなにをやってるのだろう。
みぞおちが縮み上がるのと、ブレーキを締めるキュッという手入れの行き届いた小気味のよい音がするのが同時だった。前輪が木夏の太ももに触れる際で止まっている。
私を驚かそうとする二人の企みに見事にはまっただけなのは頭で理解できても、危険を察知した体はまだ震えをやめない。
「あんたたち、バカじゃないの」
木夏に向いていた少年の切れ長の目が、私の顔面を裂くように向けられた。
「だれ、このひと」
「あぶないじゃないの」
私は木夏の保護者としての体面で、少年に向かってきつい口調で言った。少年の無謀さに対して、私は圧倒的に正しいつもりだった。
「リコちゃん。ママのいもうとだよ」
木夏は勢いのある声で私を紹介した。幼稚園の運動会の観覧席で、姉と余木さんの隣にいる私を、友達に紹介してくれたのと同じ調子で、あたしにはこんなおねえちゃんがいるんだよ、と暗に自慢している。返された少年の口ぶりはひどく軽かった。
「オバサンかぁ」
鼻先でわざとらしく、ふんっと息をした。「あんたに文句いわれる筋合いはないよ。キナツを庇わんかったやろ。えらそうに言うなら、体当たりして自転車、こかせよな、からだ張れよ。そんなら文句、訊いてやる」
腹立ちで返答ができない。姉なら、私の母ならどうしたか。母が一人娘の私を庇って危険を承知で自転車を遮ったとしても、それは、小さな娘は母の分身だったからにほかならない。少年は勘違いをしている。庇うかどうかが何かの尺度になりはしない。人はそんなに簡単ではないのだ。
「あんた、幼稚だね」
少年の切れ長の目に向かって冷たく言った。少年は近視のひとが目を細めるようにしかけてやめ、真顔を向けた。そして跨った自転車を片足で支え直し「まったな、キナツ」と片手を振った。
遠ざかっていく太いタイヤの自転車。荷台のミカン箱は満載で、上に積んだ大きなバナナの房の黄色が鮮やかだった。私は憮然として見送った。
「すぅごくハラ立つよ、あのこ」
私は木夏のてまえ強がったが、威勢のよい声はでなかった。少年の言うことも正しく思えた。でも違ってる。人はそれぞれなのだ。
何色かわからない混ざった光が体にぶつかってきた。そばの店の電飾看板に明かりが入ったのだ。前方の店先では、点滅する電飾の前で、黒い服のおにいさんが辺りを見まわしている。
薄い衣装のおねえさんが、道の真ん中に立っている私たちに、何だろうという面持ちで顔を向け、店に戻りかけてふりかえると、木夏に小さく手を振って、赤くくっきりと染めた唇のかたちで何か言った。私は慌ててぺこんと頭を下げた。少年とおなじく木夏によくしてくれるひとなのだろうと思ったからだ。
木夏は耳の横で片手をにぎにぎと合図のようにおねえさんに送ると、その手で私の手首をとった。私と木夏の足もとは薄暗く路地に沈んでいる。
「こっちから、行こ」
先導する木夏に私はあらがえない。この路地は木夏のテリトリーなのだ。私はまるっきりの一見さんだった。

「わざとじゃないもん」木夏は抗議する。「いっつもやってるんだよ」
そういうのを馴れ合いっていうのよ、と言いかけて口を噤んだ。そんなに頻繁にうどん屋に預けられている木夏。姉は結婚して専業主婦になった。今も続くおばさんとの縁とは何だろう。
「わかった。でもびっくりしたし、わたし、こわかったのよ」
木夏に手をひかれて次の角を曲がると、左右は板塀の民家になった。塀が途切れた所から、畑が広がっていた。薄闇に目が慣れると、電飾の瞬く路地よりまわりがよく見えた。山裾の参道の入り口にある鳥居が見通せた。
「あら、こんなところに出てくるの」
石段の参道は大社のある頂上まで続いている。
「あんた、来年学校でしょ。体操服で登らされるわよ。足がわなわなになって、つぎの日起きたらひどい筋肉痛よ」
一年生は麓の神社までだと教えなかった。私の前に立つ木夏の頭は、山の稜線に沈んだ大社を向いている。
「ほら、行くでしょ、あそこ」
木夏が指をさす。「あ、かくれた」
「え、なに？」
「ほら、また。見て、見てよ」
隣の市から、大社の山を峠越えして街にはいってくる車のヘッドライトが、樹木の隙間を縫うようにして降りてくるのだ。
「にいちゃんね、自動車のタイヤをおなかでひっぱって、あの道をのぼるんだよ」
「さっきの自転車の男子のこと？　力持ちね、何かのトレーニングしてるのかな」
「中学生。卒業式がすんだら、競輪のがっこに行く」
「ふぅん、競輪選手になるんだ。すごいね」
この町は賞金のかせぎ頭が生まれた町だった。地元の競輪場では、暮れになると、引退したその選手の名前を冠にした記念レースが開かれる。足をのばせば地方競馬場、競艇場があった。
そんな土地柄だからか、誰かがふいっといなくなったり、あそこの人は賭け事で借金が嵩んで逃げた、という噂が団地で遣り取りされるのは、特別なことではなかった。聞いた者は、それならそれでいいという受け入れをした。破綻した者に振り回されるより、残った家族だけで生きる術を探すほうが穏やかに暮らせるのだ。
賭け事で身を持ち崩す者に同情はなかったが、厳しい訓練を受け、自分の身ひとつで挑戦する選手は、憧れと尊敬で語られた。

姉は、木夏が小学四年生の冬に家を出た。私は司書の資格で私立大学に勤務して三年がたっていた。
姉の失踪を知ったのは、職員の控室で昼の弁当を開いているときだった。携帯電話に姉の名前が表示された。そういえばひと月くらい遣り取りしていないなと思いながらあけた。いつもなら途端に飛び込んでくる姉の声がこない。
就職してから、姉が平日の昼間に電話をしてくることはない。
「ママが」
子供の声だ。ひしゃげてる。
「え、だれですか、キナツ」
「ママがぁ、かえってこない」
私は弁当箱に蓋をしながら声をひそめ「ちょっと待ってね」と外に出て話した。余木さんが怒って、姉に出ていけと言ったことしか分からなかった。
「お仕事すんだら、木夏んっち行くから。いっしょにご飯食べよ、ママのこと一緒に待つから」
木夏はしゃくりあげていた。切ろうとして気づき、どきっとした。
「これ、ママの携帯よね」携帯を手放さない姉が、それを置いて行った。体から体温が足元に抜けていく。ただの夫婦喧嘩ではない。
「あんた、もしかして、これ、ミフユさんの、で、かけてるの。そうよね」
体が小刻みに震えた。財布くらいは持っているだろうけど、手ぶらで出ていったにちがいない。
仕事が終わって余木さんの家までの、小一時間ほどの帰宅ラッシュの電車で立ったまま、考えていた。私がこんなに慌てているのは、うどん屋のおばさんがらみのことが関わっているのではないかと、漠とした不安に駆られているからだ。
姉の援助がなければ大学を卒業できなかった。経済的な姉の負担と、うどん屋のおばさんをとおして感じた姉の秘密が繋がっているように、思えた。何かがあからさまになって、姉の結婚生活が破綻しかけているとしたら。
姉から連絡はなかった。余木さんにはあったのかもしれないが、私からはきけなかった。出て行ったのが姉の意思ではなく、余木さんの怒りだったからだ。怒りのわけを知りたかった。
仕事帰りに食事を作りに寄り、木夏の宿題を見て、明日の用意をさせ、風呂にいれてから家に戻った。
半月たって月がかわったとき、カレンダーをめくりながら、お手伝いをしてほしいと木夏に言った。教えたのはお米の洗い方とタイマーの合わせ方だけにした。

「水は冷たいけれど、頑張ってくれれば、すぐにごはんが食べられるよ」
炊飯器の内釜に薄く水を張り、小さな手の甲に私の手を重ね、米を研ぐ力加減を教えた。木夏は私のいう手順で丁寧に洗い、何度も水を替えながら、得意そうに私を見上げた。
余木さんと顔を合わせても、何気なさを装って挨拶し、帰った。余木さんが早く帰れる日を工面してくれると、体は楽になったが、気持ちはかえって落ち着かなくなった。

余木さんから、直帰できるので木夏と夕飯できます、ゆっくりしてください。お世話になります、とメールが来た日、私は意を決してうどん屋のおばさんを訪ねることにした。
路地の街に踏み込む角で、私は立ち止まった。このまま帰ろうかと一瞬思った。でも姉を知るための手ずるは、おばさんしか思い当たらないのだ。
私はコートの襟を立て、夜の路地を入って行った。内心、おばさんがいないか店が休みならいいと思った。でも、おばさんはいた。私を見ると、ずっと待っていたような親しさで「いらっしゃい」と言った。
こうやっておばさんは相手をたらしこむ。玄人としての、おばさんのわざだ。この人を相手に、どう斬り込んでいけば、かわされずに姉のことがきけるか、私に策はない。しかしそんな心配はいらなかった。
おばさんは「そこにすわって」と言いおくと、暖簾をなかにいれた。
「ミフユのことやね」
それから話されたことは、どこか遠くで起こった他人事のようだった。
それは、ある男が、姉にもう一度会いたいというのを、おばさんが仲立ちをしたのが始まりだという。姉は、ええよ、と応じた。
「あんたのお父さんが転勤したやろ。あのころ、レストランやめてこの先のスナックに移ったんやけど、えろう荒れとったなぁ。心配になって、三人ほど確かな客を紹介したんや。わたしにかくれて知らん客と付き合わん約束で」
私は中学生で、志望の公立高校に受かるかどうか瀬戸際だったころだ。自分のことで精一杯だった。姉の様子がどうだったか覚えていない。
「ああいうこは、たまにおるんよ。アシ抜けんのよ」
姉の勤めるスナックがある風俗街の評判も、学生になってから知ったが、姉は素人のカウンターレディだと疑いもしなかった。
「余木さんは、この商売承知で結婚したんよ。木夏がおなかにおったからな」
おばさんは考え込むふうに間を置いて続ける。
「あのこが産みたい言うて、結婚してみたら、子ぉがおらんかったら自分と結婚しなかったやろて。そういわれてもなぁ。余木さんかてそれで責められてもな。結婚式せんと一緒になったのもあるんかな」
おばさんは立ち上がってビールを一本持ってきて私に勧めた。首を振ると手酌で呑み始めた。
「キナツをバギーに乗せて時どき遊びにくるようになったんよ。そのうちに昼間に会える人紹介してほしいて。まだあんたらの父親の会社が繁盛してるころやで、嘘やない。大学の入学式に行ったとやら、来るたびにあんたのこと話してたで」
「姉はそのために、ここに木夏を預けていたんですか」
おばさんは私の問いを無視して続ける。
「これだけはあんたにつたえてほしいて言うてたから、よおぉに訊いといてや」
私は突然匕首を突き付けられたように固まった。
「商売また始めたんは、あんたの学資のためやない。これは夫婦の間のことで、あんたには関係ない。会社が潰れた時、自分は貯金を持ってた。あんたを援助するのに充分な額や。あんたが大学行って本に囲まれて仕事するのを、ただただ見たかったからやて」
おばさんは、暫らく黙って呑んでいた。
「あんたがきっとここに来るやろて、言うてたよ」
私は、最初に訊くべきだったことを思い出した。
「無事ですか。だれかと一緒ですか」
息せききった私に、おばさんはグラスを置いて、ゆっくり答える。
「ひとりやで。住み込みで働いてる。うちの知り合いの素人さんの店や」
おばさんは、話はすんだという顔で、私を見た。姉は私に会ってくれないだろう、おばさんも会わせる気はない。
「三人で暮らしたい、って伝えてください」
おばさんは小首を傾げた。
「いまんとこ無理やね。余木さんが承知せんやろ」
「木夏を、さらってきます」
「ええ？　尋常やないこと言うなぁ、このおじょうさんは」
おばさんは笑った。そして生真面目な顔になって私と目をあわせ乗り出してきた。
「今はダメや」
内緒ごとのように小声だ。私も声をひそめた。
「いまは？」
頷いて、おばさんは背中を椅子にもどすと、

「余木さんに時間かけて話してみるからな。先を考えん軽挙妄動は慎しまなあかん。木夏がかわいそうや」
おばさんは残りのビールを呑んでしまうと立ち上がり、中に掛けていた暖簾をとり、引き戸を開けた。私が外に出ると、背伸びをして暖簾を掛けながら
「気ぃつけておかえりなさいや。また来たらええ。たいていおるから」
酔っ払いや、客引きがいた。私はもう嫌でも怖くもなかった。けばけばしい電飾の看板もユーモラスにみえた。帰りの電車はすいていた。
ああいうこは、たまにおるんよ、と言うおばさんの口調が耳を離れない。突き放した言い方が、私に鋭く突き刺さっている。
父が身近にいれば、姉はパン屋をやめなかった、と考えてみた。パン職人になっているかもしれなかった。

姉の失踪から二か月ほどして、木夏の世話が負担になってきたころ、姉は木夏を連れ去った。さらったのだ。インターホンに返事がないので、預かっていた鍵であけると、人の気配はなく、テーブルの上に木夏の字で、「ママといきます。ありがとうございました」と書き置きがあった。
私は一人ぼっちになってしまった。気持ちが塞ぐと、深夜ちかくにうどん屋に行った。化粧の剥げたお姉さんや、こざっぱりしているけど薄っすらと髭の気配のあるお兄さん。お兄さんだかお姉さんだかよくわからない風貌の人たちと何度も乾杯する。寄ってくる男には、おばさんが「ハナさんの妹や。しろうとさんやで」と追っ払ってくれた。帰りはタクシーを奮発して午前様だ。
親しい男性ができると、私は深夜のうどん屋の喧騒に、彼を連れて行った。すると、次にあったとき、距離をとろうとする人、妙に親密にくだけてくる人、いろいろだった。私は、どちらに対しても、相手が私に疎遠になるよう仕向けた。おばさんから露悪趣味だと言われた。
「こんど連れてくる人は、押し倒してでもモノにしたい相手でなかったら、出入り禁止やで」とおばさんは笑う。
「当分一人でくるよりないみたいです」と私は返す。

それでも私は結婚にこぎつけられそうだった。申し出を受け入れるかどうか、迷っていた。三十歳になっていた。夫になるかもしれないひとを伴って、日の暮れのうどん屋にむかった。明るいうちに行くのは、私が学生で木夏が園児だったころ以来だ。
初めてうどん屋を訪ねたのとおなじ真夏の西日のあたる時刻。そのときと違っているのは、うどん屋で顔見知りになったお兄さんやお姉さんが少しばかりいること。私がおどおどしていないこと。

店に戻ろうとした短い衣装のおねえさんが振り返った。おっ、という表情で、ちいさくファイトのポーズをとって手をふると、忙しそうに扉の奥にきえた。私はその後ろ姿に、顔をあげて笑みをかえした。
うどん屋のおばさんは、射るような目で連れを一瞥し、すぐにいつもの人たらしの相好になった。
「いらっしゃい。ビールと枝豆やけどよろしいか」
「これからご飯、いきます。ちょっと早いからおばさんの顔、見にきました」と、連れの苗字を紹介した。
「ようおこし」
おばさんはビールをテーブルにとん、と置き、私たちの前に腰かけた。
「姉がお世話になってるおばさん」と紹介した。
おばさんの情報は、母子でアパートを借りて暮らし、木夏の親権は余木さんが譲らないままになっている、ということから進展していない。
「しょうないな、余木さんの気持ちも汲んであげんと」
「電話くらいくれてもいいのに」
「あんたを巻き込みたくなかったんや、ことがことだけにな、自分に利がないのは知っとるから。それでもミフユにかて言い分はある。夫婦やから」
そこまではこれまでにおばさんと遣り取りした内容をなぞっていた。
「ミフユが家だされる前の日、余木さんがここに訪ねてきたんや、また商売始めたんと違うか、教えてくれというて」
私は息をのんだ。私の隣で微動だにしなかった連れが、おばさんのグラスにビールを注ぐ。
「それが気になるなら、あのこはやめとき、いうたよ。世間にはいろんなこがおる。長いことこの商売しとったらわかるんよ、足洗えんこがおる。あのこは足洗えんよて。今ふうに言うたら、リークしたんは、うちや」
「どうして」私はおばさんの顔を見据えた。
「うちがミフユを庇うたら、あの夫婦は木夏と三つどもえになって、えらいコトになるとおもうたんや」
連れは黙って聞いている。
おばさんのところを出た。連れも私も押し黙って歩いた。どの店も営業を始めていて客足もあったが、客とおぼしき男たちは、待ち構えている黒服のお兄さんに誘いこまれて、消える。私たちが行く路地の真ん中は空っぽだった。

連れが夫になって、五度めの結婚記念日が過ぎた春のことだ。狭いけれど庭のある借家に住んでいた。子供はいない。

夫は大学の生協勤務。趣味の吹奏楽でコントラバスを弾き、仲間とバンドを組んでライブ演奏もしている。ちょっとした腕前だ。
「あなたって職場でちょっと変わり者とか浮いてるとか思われてる？」
「趣味に明け暮れてるって？　さあどうだろ」
私は図書館の分室に勤め、勤務のかたわら、朗読のボランティアをしている。父は「再婚しました」という葉書に、母は結婚をしていて、息子が一人いるらしい、共通の古い知人から聞いたと書いていた。父とは結婚式に来てもらった義理で、年賀状の遣り取りをする程度のことはしている。「どちら様もおめでとうございます」と一行きりの返事にした。
母に触れることは書かなかった。おばさんとは疎遠になっていた。
桜が散ったあと、小雨の降る肌寒い日が続いていた。仕事が終わり、晴れ間をぬって帰ってきたのだが、バスを降りて家の手前の横丁まで来たとき、降りだした。少しの距離だから走ろうかと思ったが、雨粒が突然大きくなった。慌てて よその家の軒下に入り、肩に掛けたトートバッグの中を手探りで傘を捜した。
傘を広げようとしたとき、ランドセルをガチャガチャいわせながら女の子が目の前を全速力で走り去った。キーッという自転車のブレーキ音と、タイヤがアスファルトを擦る嫌な音がした。ちょっと間をおいて、向かいからマウンテンバイクの少年が来て、私の前を通り過ぎていった。
傘をさして、こわごわ道路に出た。ランドセルの女の子が立ち竦んでいる。声をかけようとしたとき、少女は背中を向けてとぼとぼと歩きだした。私は距離を保って濡れ鼠の後ろ姿を追い、少女が角を曲がるのを見送った。私の前から消えた十歳の木夏は、あれくらいの背丈だった。
ついさっきまで、五月生まれの木夏が二十歳になるのは、今年だったか来年だったかと記憶を手繰っていたのを思い出した。降車した途端の雨で、すっかり忘れていた。
姉への返済はすんでいたが、通帳は解約されずにあるので、木夏の誕生日に少額の振り込みをしている。ことしが成人式なら、お祝いの気持ちを伝えたかった。けれど、メッセージ付きのカードもプレゼントも送るすべがない。今も住所を知らないからだ。気持ちをあらわすのに、金額を増やすしか手立てがないのが歯がゆかった。

五月の連休が明けた真夏を思わせる日だった。木夏は来週二十歳になる。お祝いの振り込みはすませた。
夫がバンド仲間との飲み会に行くので夕食をこさえなくてよい。気楽な気分で帰ってくると、うぐいす色の大きめの封筒がポストに入っていた。隣町の区役所から、私宛だった。咄嗟に浮かぶのは、母か姉の悪い知らせだった。
キッチンのテーブルに封筒を置いた。この薄い封筒に詰まっている情報は、封を切ったあと、私の世界をひっくり返してしまいかねない気がした。心して向かわねば。コーヒーを入れる支度をし、部屋が香りでいっぱいになるのを待ち、ひとくち飲んでから、鋏で丁寧に封を切った。
三つ折りの用紙を広げると姉の名前があった。住所は空欄になっている。内容は、姉が生活保護の申請をしているが、扶養義務者である私に援助をする意思があるかどうかの照会書だった。
事態がつかめない。
「ってことは、働けなくなってるってことだわね」
私は声に出して自問する。
「どういうこと？」
木夏はどうしてるという言葉を飲み込んだ。
書き込み欄のある「扶養届」の用紙にざっと目を通した。時計を見るまでもなく役所は閉まっている時間だった。たたんで封筒に戻すと、立って行って冷蔵庫をあけた。冷気が手にかかる。そうだった、今晩は私だけだから料理はしない。残り物ですませばいいのだ。
遅くにご機嫌で帰ってきた夫は書類を一瞥すると「ああこれね。金銭的援助の欄はバッテンつけて、精神的支援は可を丸で囲む。余計なこと書かないよ。おねえさんが必要だと申請してんだから」と軽やかに言った。「カネのことは別に考えたらいい。それより近況を探るべきだよ。この書類、あしたぼくが書くから置いといて」
てきぱきとした夫の対応に呆気にとられた。
「くわしいのね」
「うちにも外に、独り者がいてね、通知はぼく宛てにきたんだ。学生だったけど」
話し方が緩くなる。
「知らなかった。そうだったんだ」
「死んじゃったからね」
しんみりした打ち明け話になるのか、と気を引き締めて聞こうとすると、軽い口調に戻る。
「どこの家にも何かしらあるもんさ。役所に電話して連絡先問い合わせてみ。教えてくれなかったら、こっちの電話を先方に伝えてもらうといいよ。ぼくはぁ、いまから風呂に入る」
はぐらかされた気がした。着替えを脱衣場に持って行き、磨りガラス越しの夫の背にいう。
「酔っ払いさん、こないだみたいに、浸かったままで寝ちゃわないのよ」
夫の両親は離婚し、父親は死んだと聞いている。

「ねえ、言いたくなきゃいいけど、外の独り者って、おとうさんのことでしょ」
と風呂場の扉ごしに言う。
湯の音が静まり、湯船から立ち上がる音が、ざんぶりと聞こえた。咳払いのあと、
「そうだよ」と大きな声がした。全開にしたシャワーが床に当たっている。すぐに皮膚を弾く音にかわった。

翌日、役所に問い合わせた。姉の連絡先は教えられなかったが、私の電話番号を知らせる了解を求められた。至急電話をもらいたいと伝えた。
ぎこちない木夏の声を聞けたのは、次の日の夜だった。姉は脳梗塞になったのだ。半年たって容態は落ち着いている。申請をしたのは蓄えが尽きたからだった。木夏は報告する口調で訥とつと話し、私は相槌を打つばかりだ。緊張が伝わってくる。
木夏の闊達な声が聞きたかったのに、症状を尋ねても、口籠るばかりだ。私は詳細を知るのを諦めて、週末に病院で会う約束をした。電話を切りかけて、胸が詰まった。追いかけるように言った。
「キナツ、あんた、五月で、はたちになるのよね」
「うん」と幼い声が返ってきた。

住宅に囲まれた病院は、行ってみると精神科病院で、広い敷地いっぱいに三棟が建っている。総合病院だと思い込んでいた私は、内心うろたえた。木夏が口籠ったのは、母親を精神病院に移した苦しさからかもしれない。
外来診察の受付時間はすんでいたが、家族に伴われた患者らしい人はまだ数人ソファーに掛けている。そこからすっと立ち上がる人があった。肩までの髪、ストレートのジーンズにトレーナー。近づく私を見て、くしゃりと笑った。笑い顔に別れたときの十歳の木夏の顔が重なる。呼びかけようとした時、後ろに立つ青年が頭を下げた。きょとんとして私は二人の顔を交互に見た。
「おにいちゃんです」
切れ長な目に覚えがあった。
「あの自転車の？」
身長は長身の木夏とかわらない。驚きと安堵の感情が湧き上がった。おもわず木夏を素通りして、青年の手をとった。
「ついていてくれてたの。ありがとう」
木夏の話によると、姉の体の麻痺は軽くてすんだが、言語野に損傷を受けたので、考えたり思ったりすることがうまく言葉にでない。字も書けなかったが、自分の名前は書けるように教えたという。

「ママはもともと書くのも読むのも苦手だから、それはま、いいけど」と一緒になって笑えもしないことを言う。
「待ってるから行こう」と青年が促す。「俺たち今までママのとこにいたんです」
青年は先に立ってエレベーターの前まで案内すると、店があるからと帰って行った。
「おにいちゃん、果物屋さんになったの」とエレベーターの中で木夏が教えてくれた。
女子病棟のナースステーションで記名簿に名前を書いていると、
「連れてくるね。面会室で待ってて」と木夏は言って向かいの部屋を指し、廊下の奥に消えた。
面会室に人はいなかった。簡素なテーブルを肘掛け椅子が囲んでいる。端にパイプ椅子が畳んで重ねてある。私は仕事カバンと手提げを肘掛け椅子に置いて廊下に出た。
廊下を歩く女の人たちは、年齢も様子もまちまちだ。丁寧に挨拶をしていく人。立ち止まって怒りの混じった視線を向ける人。舌打ちをして立ち去る人もいる。不安が膨らむ。青年は、姉が私を待っていると言ってくれたが、どんなふうに私は迎えられるのだろうか。
木夏が薄桃色のガウンを着た人を伴って廊下をやってくる。姉とおぼしき人は、ゆっくりだが手摺を持たず自力で歩む。木夏が何か囁いた。姉が頷き顔を上げて私を手招きをする。私はその手から目を離さず小走りで直進し、掴んだ。ひんやりと骨ばっている。
「あほになってしもうたけん」
姉は空いた手で自分の胸を叩く。
「トイレに行ってたの。待たせてごめんなさい、でしょ、ママ」
「そのとおり」
私は泣き笑いの顔になってしまった。洟をすすりながら、
「ミフユさん、リコだよ。木夏、べっぴんさんになったねえ」
「そのとおり」
三人でケーキを食べながら木夏と話していると、姉はノックするように自分の胸を叩いて話に割り込もうとする。頬を膨らませたり窄めたりして言葉を吐きだそうとする。出てこない。苛立って胸を拳骨で打つ。木夏が推測して代弁する。が「そのとおり」にならないと、「あほになってしもうた」を繰り返す。それを見ているのは辛いが、姉と木夏との遣り取りはおかしくもあった。
団地で父と三人で暮らしている頃の姉は、こんなにお喋りではなかった。私が父と話し、姉はにこにことして聞き役に回る。自分からは喋らなかった。

木夏は大学で音楽療法士の勉強をしている。ピアノは姉が習わせた。驚く私に、
「テレビばっかり見てないで何かしなさいって言うから、ピアノ習いたいって言ったの。そしたらパパが買ってくれた。ヘッドホーンで練習できるから夜でも弾けるの。先生が厳しくってね、すっごく練習したんだよ」
姉が何度も頷く。余木さんは再婚して子供もいるということだ。木夏は余木の姓で二十歳になる。余木さんは親権を譲らないことで姉を罰したのだ。とうとう姉を許さなかったのだと思った。
青年は競輪選手ではなく、父親から独立して、高級品の果物を扱う店を繁華街から離れた隣町に構えている。

病院は職場から近かったので、土曜日の午後、仕事帰りに寄ることにした。見舞いに行くたび近所の公園まで散歩をする。姉の語彙は増えている。言いたい事を推測して代弁する私の技術もあがってきた。手紙を書くように勧めた。姉が言ったことを私が代筆し、それを見て本人が清書する。一字ずつ図柄を写す感覚で清書するのだ。
夫は木夏を気に入っている。ジャズピアノを習わせてバンドの仲間に入れたいみたいだ。
今日は午後からお天気は下り坂と予報がでていた。病室で聴けるように、家で入れた朗読テープもバッグに入っている。
そのテープには、宅急便の配達員の声、電話のコール音、ピーピーケトルのすさまじい音に、探し物をする夫の声。隣の犬が噛みつきそうに吠えている声も入っている。「しょうがないわね、ちっともすすまないわ」と愚痴る私の声も。姉はすべてをひっくるめて「おもしろい」と受け止めてくれる。
雨になったら、このテープを、お菓子を食べながら二人で聴こうとおもう。